

## 臨床検査システム更改におけるプロジェクトマネジメントの実践報告

◎田中 芳次<sup>1)</sup>、吉岡 辰泰<sup>1)</sup>、岡崎 陽子<sup>1)</sup>、後藤 寛子<sup>1)</sup>、加藤 貴紀<sup>1)</sup>、瀬川 貴恵<sup>1)</sup>  
N T T 東日本 伊豆病院<sup>1)</sup>

### 【目的】

臨床検査分野においてプロジェクトマネジメントをまとめた報告やマネジメントスキルを学ぶ機会は少なく、プロジェクトの実行に際し情報を得ることが困難である。今回、臨床検査システム更改においてプロジェクトを立ち上げ、各種フレームワークを通じて導入プロセスの管理をユーザー主導で行うことができたので報告する。

### 【対象】

＜臨床検査システム＞

更改前：CLIP（オービシステム社製）

更改後：MELAS（アイテック阪急阪神社製）

＜検討対象としたフレームワーク等＞

6Rフレームワーク、プロジェクトチャーター、モタリングシート

### 【結果】

・6Rフレームワーク：要求の上位目的を捉えることや要求の具体化に必要なフレームが整備され、「見える化」に有用であった。また、プロジェクトマネージャーが意思決定をする際の判断基準として活用が可能であった。

・プロジェクトチャーター：プロジェクトの定義や定量的なアウトプットにつ

いての必要事項が網羅されており、オーナーやメンバーと共有する憲章ツールとして有用であった。また、プロジェクト完了後の評価にも利用でき、PDCAサイクルを回すための評価ツールとしても利用可能であった。

・モタリングシート：各フェーズの作業日程を日付ではなく時間単位としたことでタスクの進捗とバッファ消費時間の管理を詳細に行うことができた。また、ベンダと要求元の作業時間感覚を統一することでバッファ時間の浪費を抑えることができた。

### 【考察】

要求元（検査技師）がプロジェクトマネジメントを積極的に行うことによる効果は高いと考えられた。一般的なフレームワークや管理ツールは臨床検査システム更改プロジェクトにおいても活用可能であり積極的な利用が不確実性を乗り越えす上で必要と考えられた。プロジェクトマネジメントを通し、事例の共有や振り返りによって経験を資産とすることで種々のプロジェクトへの利活用が期待できる。システム導入後については様々な課題が噴出してくるが、安定稼働にはサービスマネジメントへのスムーズな移行が必須であると考えられた。